

タイトル「魔導鑑定師アルダンと魔剣系女子高生」

—概要—

ファンタジーボーイミーツガールもの。

セールスポイント

ファンタジー世界におけるスローライフミステリー。「在りそうな世界」を書く。通っていた大学に研究資材を借りたり、調べものしたり、

時代

魔王と勇者の戦いが終了して数百年が経過した時。

場所

冒険者事業を主軸にきりもみしている都市「マグメル」を中心に、アルダンの店に集まるアイテムや魔道具が引き起こす珍現象や災害などの対処に追われる。

主人公

魔導鑑定師を名乗る少年の風貌をした魔物アルダン

動機

此处を世界一の魔道具屋にする、という目的から危険を顧みず様々な魔道具を集めている。その目的は、一貫して変わらない。

目的

発見・鑑定・改良・解決の流れ。

が、「魔王の遺産」と呼ばれるアイテムを集めてしまい、徐々に色々な勢力に狙われたり逆に狙ったりしている。

物語の始まりと結末は、「魔王の遺産」を完全に集める事を目的としている。

悪役

魔道具を狙う種族・勢力・結社・冒険者たち。アルダンの目的が一貫としている為、敵が味方に成ったり味方が敵になったりする。なお、本人は非常にマイペースである為、この前の因縁とかそういうのは全く気にしない。

冒頭

アルダンの魔道具店で盗みを働いている魔導JKであるヒルダをひっ捕らえる所から斧語りが始まる。

なぜ魔道具を狙ったのか、ヒルダの背景と人生、その背景にいる暗い組織の存在、それを解決する為に立ち回っていく。

最終

で、面倒くさくなって組織を壊滅状態にさせる。

最後にアドラメレクら協力者と締めパーティ的な奴を開く。街総出で。

—登場人物—

・アルダン

「魔導鑑定師アルダン。年齢は不詳だ」

「なんだ、そんなナリして身分を隠しているのか？」

「違う、俺にもわからないからだ」

「……」

冒険者の街「マグメル」にて廃業寸前の魔法具店を経営する少年。その正体は変幻自在の魔物「シェイプシフター」。

散財癖のある街の変わり者だが、こと仕事に関しては生真面目で非常に面倒見が良い。常に金欠に見舞われており、時々ダンジョンに潜りこんだり臨時のバイトをしたりする姿が街で見受けられる。また、強さゆえに「危機感」が欠如している。

青白い髪に赤い瞳。いわゆるシヨタであり、その大人びた貴族然とした雰囲気に対しては見た目は非常に子供っぽい。腰に掛けた宝箱が特徴。

が、その見た目に反して戦闘能力が高い。主に剣を使う。特に道具の扱い方や対処法、未知の宝物の解析や鑑定などにおいては右に出るものはいない。改造や改良、無数のマジックアイテムを駆使して戦い、そのどれをも極限なまでに使いこなす技量の高さが特徴的。

この能力の弱点は、「物質化しているもの限定」に作用するものということ。

切り札は降魔術式における最高峰である「令始血戒：無形^{シェイプシフター}ノ王」。

物語は、彼の街の散策や経営維持のための金稼ぎによって拾ってきたマジックアイテムによって物語は展開されていく。

・ヒルダ

「ヒルダ。とりま、しくよろ」

「なんだそれは」

「……巷の挨拶みたいなもん。深い意味はないよ」

「ほう……おつぽよ、つらたん」

「マジでやめろ」

街が運営する魔導学院に在籍する女子高生17歳。違法なバイトをしている所でハマをしてボコボコにされている所を、偶然アルダンによって助けられ、以来彼の下でアルバイトとして会計・助手を任されることに。

ダウンナー気質の黒髪元ヒューマン。が、曲がったことが大嫌いかつお人好しで在るため、アルダンについて面倒ごとに巻き込まれる傾向にある。作中屈指の常識人である為か、常にツッコミに回される傾向にある。

剣術を主に利用する。こと剣術のポテンシャルで言えばアルダンより上に位置する。

バイトに勤しむのは早く親元を離れて独り立ちする為であり、違法な手に染めていても決して我欲の為に使うことはない。

違法のバイトで手にした魔剣によって変異した肉体を元に戻す為に、アルダンと行動することになる。

・フェリス

「おいっすー！」

「おいっすー」

「……」

「声が小さい！ 特にヒルダとアルダン！ もういっちょ！ おいっすー！！！」

「喧しいな……」

「おいっすー！！！」※アルダンです

「言うんかい」

天真爛漫のギャル系稼ぎ頭のエルフっ子。同じくマグメル魔導学院に所属する女子高生。頭のネジが緩いがそのスペックはかなり高く、経営破綻寸前だったアルダンの店を持ち直す程度には稼いでくる。特に言語分野で優れている為、交渉や売り出しにはもってこい。

が、ネジが緩い為に金使いが荒く、100%発揮しようとする為に稼いだ分を消化する。

詠唱魔法の素質が非常に高く、大変珍しい「降魔術式」と「転聖術式」の二つの術式を持っている。こと魔法においてはあらゆる分野に出でており、属性を問わない。

反面、体力が絶望的に無い。

物語においては賑やかし担当で、いつもコイツが大ボカやらかす。

・リノン

「見てみてヒルダ、おいしそうでしょ？」
「そっか——そのニンニクの山みみたいな麵料理が？」
「リノンお前……」
「アルダンが絶句してる……」
「まだ終わらんよ」
「ノリノリかよ」

お淑やか系お嬢様な錬金術師の獣人。

・アドラメレク

「これはなんだね？」
「詳細はわからない——ただ俺の周辺のものが全て爆発物に変わる。一つ残らずな」
「ふむ……その割には使用感は悪くなかったようだが？」
「粗大ゴミの処理に使った」
「……………そうか」
「せんせ、いいんですかソレ」
「今に始まったことじゃない」
「そすか」
「失礼だなお前ら」

アルダンの店のオーナー。アルダンが（勝手に）通い詰めている大学で講師をしている女。白衣と真っ黒な衣装に、黒髪と黄金の角が特徴。アルダンの黒コートと対になる印象。

作中では基本振り回され、裏方においてはアルダンの秘書枠にあたる。

物静かで冷静沈着だが、ちょっとした好奇心と悪戯心の所為でいつもヒルダやアルダンの活動に巻き込まれる。趣味は縫ぐるみ作り&集め、病的な程に可愛いものに弱い。アルダンに強く出れないのも性癖が関連している。あだ名は「変態」。

戦闘はもっぱら前線で魔術支援タイプ。火力・連携・強化などのバフのスペシャリスト。

・ミト

「おじゃましますニトロ屋さん！ また来たよ！」
「二時間前にな……それに何度も言っているがここはニトロ屋じゃない。道具屋だ」
「あ、ごめんなさい！ じゃあ一時間後にもう一度出直します」
「早く要件を言え」

田舎から上京してきた新米冒険者。22歳。

メイス使いの女。馬鹿っぽそうに見えて才能の片鱗を感じさせるタイプの子。

天真爛漫で勘と才能で生き残れるタイプの人。

迷宮で死にかけた所をアルダンとアドラメレクに助けられ、以来は指導役を探してやったり魔道具について勉強させたり、素材調達の依頼を出すなどのやり取りを行っている。

・マルクス

「いや、なんかほんとすみません」

「いや、良い。俺のまいた種だ。ここまで懐かれるとは思わなかったが」

「落ち着けとは言ってるんですけど……」

「この前うちの暖炉で重要書類を火種代わりにしていたんだが」

「その件に関しちゃマジですんません」

作中屈指の常識人。26歳のベテラン冒険者。

盾使い。アルダンの無茶ぶりすらも呑み込んでしまうタイプの苦勞人。

彼は偶然アルダンと仕事が被った事でその技量と気質をアルダンに目を付けられ、以来冒険者関連の面倒ごとの相談だったり時には押し付けられたりする関係になっている。

なお、現在装備している武装や鎧は全てアルダンが提供し改造費を抽出したもの。割りと食わせて貰っている切っ掛けとなっているので頭が上がらない。

—用語—

・迷宮要塞都市マグメル

城型のダンジョンに存在する冒険者の街。冒険者関連の事業を中心に街をきりもみしており、結果として「交わりの街」と呼ばれるくらいには各地から底辺から最上までの冒険者が集まる都市へと変貌している。

防衛の関係とダンジョンの入り口が地下にある影響で違法なやりくり防止のために冒険者ギルドを街の中心に構えている。

冒険者事業を中心に様々な業界の存在が集まっており、結果として世界でもそこそこ発展する都市へと変貌している。

学校・居住区・露店通り・娯楽施設と大体必要なものは揃っている。

色々なものが集まる為、アルダンの活動を中心に様々な事件が発生する。

・魔法

降魔術式、転聖術式の大まかに二つの適正に分かれる。

その中で火属性や錬金術などの才能に分かれてくる。

その中でも魔王・勇者・賢者の血統とされるものしか持たない「^{りょうしけつがい}令始血戒」と呼ばれる世に存在する術式の起源を内包する術式が存在する。

汎用型、特化型の二つに分れてる。

・種族

人間・獣人・エルフの大きく三つに分けられる。

・魔族

レア民族として扱われている。どれくらいレアかと言うと「ダイヤと鋼」くらいが基準。

魔王活動当時の直系しか生き残っていない為、身体能力・魔力・異能のどれをとっても選りすぐりの存在。

いわば貴族の様な存在として扱われているが、魔王伝説が色濃く残る地域では迫害に遭遇したり、逆に国賓扱いされることもある。

だからこそ、色々な人種が集まるマグメルでは身の振り方を考えなければ面倒ごとに巻き込まれることになる。

闇社会では狙われることもしばしば。

—あらすじ—

起：ファンタな世界で経営破綻寸前の道具屋を経営する主人公アルダンが、強力な魔剣を手にした女子高生を拾い、彼女の周りで起きた出来事を紐解き、解決にまでもっていく。まずは行きつけの大学に行く。

傾いていた経営を改善させる会計としての才能を見せつけたヒルダをアルバイトとして雇う事に。

承：話が進む。調査の進展があったことを契機に、経営とは別に街から仕事が舞い込んでくる。

ここで伏線を出るだけ張っておく。

ヒルダの魔剣について、そしてこれまでの騒動の正体。

そして主人公が規格外の人外である事をほのめかす。戦闘力・価値観・人との接し方で。

転：話が一気に転がる。

- ・徐々に人間じゃなくなっていく事に気付くヒルダ
- ・その手にした魔剣の影響で肉体が徐々に変質しつつあるということ
- ・眼が赤色から金色に変わるようになったのもそれが影響しているとか

- ・魔剣が自我を呑み込んだとき、食人・戦闘衝動が一斉に精神を貪るだとか。
- ・でもま、今回は報酬以上に良いものを見つけることが出来たとアルダン
- ・うちの従業員は全力で護るとのこと
- ・

結：主人公の正体にまつわる存在という伏線をここで回収していく。

- ・過去の魔王の血族「無景の王：シェイプシフター」。
- ・アストラル系の魔族・精霊などの原点にして頂点の存在。
- ・それにより、過去の「秘宝」を狙い独占しようとしていた組織を実質的に壊滅へと追い込むことになる
- ・そして、今回の戦利品は「ダグラスの巨釜」。なんでもかんでも混ぜ合わせることが出来たのはこれが原因とされている。